

居場所の大切さ

社会福祉学部社会福祉学科 2年 15FF1622 久米健哉

1. 活動先

私は若者の居場所支援とプレーパークを行っている活動先で居場所の大切さを知ること目標としてプレーリーダーとしての活動を行った。

2. 活動内容

プレーリーダーとは、子ども達がやりたいと言ったことを手伝うような役割であった。プレーパークは子ども達が自分の責任で自由に遊ぶ冒険遊び場である。規制が多い現代でやりたいことをできるプレーパークは子ども達の遊びの場とともに学びの場にもなることがわかった。自然と触れ合いながら自らを成長させられると気付いた。プレーパークに来る子どもは初対面同士であることが多い。同じ子もいたりするが、見ず知らずの子どもたちと触れ合える場である。その際に人見知りをしてしまう子どもがいて、思うように遊べなかつたりする。そこでプレーリーダーとしての役割が重要だと気付いた。それは遊びの輪の中へ引きこませるようなことを行うべきだと考えた。その結果、多くの子ども達や保護者の方と触れ合える時間をとることができた。そして皆が一緒に自然と遊ぶことをできたと思う。そのための仲介役の役割もあることに気付いた。しかし、嫌々連れてこられ、拗ねている子どもとの接し方が上手くできなかった。保護者の方にくっついてしまい、話しかけるタイミングがわからず一緒に遊んでいる子から自分自身が離れることができなかった。自らの弱さが垣間見えた時であった。さらに、支援学級の子が大勢できてくれた際にもうまく接することができず、そのまま帰られてしまったこともあった。それも同じように遊んでいた子どもと離れられなかったことが原因である。仲良くなってしまうととことん遊んでしまうことがあり、多くの方と関わる機会を自分自身で薄くしてしまったことがわかったことである。少数であればうまくかかわる事ができた。一人の男の子とはとても楽しく遊ぶ事ができたし、その子の考えていることやプレーパークの楽しさをお互いに話し合えた。

3. 学び、気付き

子どもと遊ぶ中で自らも学びの場を楽しんでいた。講義の中では得られない知識が多くあったためである。ロープの結び方など、生活の上で必要なことを知ることができた。これまで生活してきた中で多く自然と触れ合ってきたと思っていたがまだまだ知らないことが多く、為になる場であった。プレーリーダーとしてそれらの知識をより多く知っていることで子ども達に伝えることもできるものだと感じた。誰とでも同じように接することができる能力も必要であると感じた。

さらに自閉症をテーマに研究をし、自閉症にも多くの種類の症状があることを知った。上で話をした男の子は軽い自閉症を持っている子であったがとても感情が豊かでなんでも気さくに話しかけてくれていた。学校では居場所が少なくあまりしゃべらないと言っていた。プレーパークにいるときでは感じなかった一面が学校にあるのだと気付いた。学校では暗く、プレーパークでは明るく元気。その子にとってプレーパークほど面白いものはないのだと気付いた。そしてプレーパークこそが自分の求めている

居場所となっているようであった。

4. まとめ

以上のサービスラーニングを通して自分自身が求める居場所というものは必要であると感じた。居心地の良い居場所があることで救われる子どもは多いと感じる。自分自身にもこのように居心地の良い居場所がある。人前では暗い人間を表向きではしてきたがその居場所では多くの感情を生み出せていると感じている。人間にはこのような居場所が必要不可欠であると感じている。自分の持ち味をうまく生かせる場にもなり、皆の知らない一面を出せるだろう。その得意な一面をゆっくりと焦らず外面に出していくことで一人の人間としての武器になるはずである。今後自分自身もその武器を出せるようにしていきたいと考えている。一步一步焦らずに進み行動していくことをしていきたいと感じた。

「子ども」とどう向き合うか ～SLから学んだこと、そして今後に向けて～
社会福祉学部 社会福祉学科 2年 15FF2877 内藤椋介

自分は、2年時から地域福祉コースに属し、4月から夏に向けて行われるサービ斯拉ーニングに向けて準備をしてきた。初めの頃は、サービ斯拉ーニング自体もあまり理解できず、地域についてどのように学んでいこう、とか、目標設定をして頑張ろう、といったような意識で臨んでいたことが、リフレクションシートを振り返って分かった。しかし、活動先の情報を調べる、担当者と顔を合わせる、事前訪問を行う、上級生からの話を聞く、活動先で一緒にグループ内で話し合いを重ねる、というようなことをするに連れて、自分の中で初めの頃の意識とは大きく変わっていった。そして、いよいよ活動を迎えて、終わった後は、振り返りをし、活動を踏まえた上で、さらに深く知りたいテーマを各々が持ち、同じテーマになった人ごとでまた新たなグループを作り、12月に行われた研究報告会に向けて準備を進め、発表をすることができた。

それでは、夏の活動について詳しく振り返ってみる。自分は、NPO法人の「新青樹」さんにお邪魔して、子どもとの向き合い方などについて学んだ。活動中で新たに学んだことの1つ目として「子どもの食欲さや無邪気さ、加えて、自然の中で遊ぶことは子にも親にも良い機会」ということ。2つ目は「子供には『居場所』が必要で、だからこそ大人が提供し続ける」ということ。3つ目は「市町村の運営をしていくには」ということ。3つ目に関しては、自分たちのグループで東浦の町役場に出向き、東浦町の町長らと会談を行い、貴重なお話を伺うことができ、理解を深めることができた。次に、活動中で達成できたことの1つ目として「子どもや担当者の話を素直に聞き行動に移せた」ということ。2つ目は「自然の中で、遊びや学びを提供する場づくりの技術を取得できた」ということ。そして最後に、活動中で課題だったことの1つ目として「偏った1人の子と喋るのが中心になってし

「子ども」とどう向き合うか ～SLから学んだこと、そして今後に向けて～
社会福祉学部 社会福祉学科 2年 15FF2877 内藤椋介

まった時があった」ということ。2つ目は「子どもに対し、分かりやすい説明が出来なかった」ということ。3つ目「障がいを持つ子との関わりが上手くいかなかった」ということ。この、3つ目に挙げた課題が、前述にもあった研究報告会に向けて、グループでの研究課題となり、最終的に「自閉症とは」というテーマの下、発表に向け研究を進めた。そこから学んだことは、自閉症には3つの特徴があること、乳幼児期・学齢期における支援方法、低機能自閉と高機能自閉の違いについてなどを詳しく調べ、学びを深めることができた。最後に活動全体を通して、自分は、人の話を素直に聞くなどのコミュニケーション力や子どもと障がい者について理解する力において成長ができた。また、自然の中で子どもが伸び伸び遊ぶことは子ども親も良い機会だということや自分が子どもに対し分かりやすい説明が出来なかったこと、そして地域の繋がりは重要だということに気づくことができた。非常に多くのことを学び、成長し、気づけたことは自分にとって大きな経験で、サービ斯拉ーニングを行うことができて良かったとおもった。

それでは、活動を通して見えてきた地域のことや市民活動について整理をする。自分が考えるには、市民活動の現状はまだまだな所があると思う。例えば、市民活動そのものに関わる人に偏りが出てしまうこと、さらにいうと、地域住民の繋がりが希薄化していることなどがある。この現状の課題を打破するために、自分が行った活動先では、子や親が関わり合う場を設けることで地域住民の繋がりの強化にも取り組んでいて、その地域において大きな役割を担っているということに気づいた。

このサービ斯拉ーニングでは、今まで自分が出来なかった経験を積むことができたので、将来に活かすことが出来たら良いなと思う。

サービスマーケティングを通しての自己成長と気づき

1. 特定非営利活動法人 新青樹 に行くうえでの目標

- 活動先を決めた経緯

私が、活動先を決めるときに心がけた点は子どもと接することができるということである。私は、子どもと接することが好きでせつかくのサービスマーケティングだから自分の好きな分野に行きたいと思っていた。そして、新青樹の活動条件に記載されている団体の活動 PR を見たときに、「いろいろな年代の人と、地域の子どもの育ち、若者の居場所づくりを考えて活動しています。」と書かれているのを見てここでサービスマーケティングをしたいと思った。また、学生に対してのメッセージとして子どもと遊ぶ体力も必要とあったので子どもと接する機会も多いのではないかと思ったのでここで活動することを決めた。

- サービスマーケティングの事前学習

サービスマーケティングに行くにあたって事前学習した。まず、新青樹がどのような活動をしているかということを知りたいと学校に来ていただいた責任者の竹内さんに話をうかがった。

現在、新青樹では3つのプレーパークを運営している。東海市の中ノ池公園にあるプレーパークランラン、半田市にある佐布里プレーパーク、東浦町にある大プレーパークの3つである。この3つのプレーパークにはそれぞれ特徴があることを教わった。プレーパークランランでは、地域に住む子どもが多く来ることが特徴である。実際に多くの子どもが自主的に遊びに来ていた。

佐布里プレーパークでは、旅行雑誌に記載されていたこともあり遠方から親子連れで来る子どもが多いということが特徴である。ここも実際に親子連れが多く、子どもだけで来るということは少なかった。

大プレーパークでは、上記の2つが混ざったことが特徴であった。地域に住む子どもが1人で遊びに来ることと、親と子どもと一緒に来る子どもの割合は同じであった。

また、プレーパークがどのようなことをしているのかプレーリーダーがどのようなものかということも教わることができた。

- 目標設定

日本福祉大学の先輩が2年にわたって新青樹に自分たちが作って何かを残してきたということを知った。先輩方は1年目にベンチを、2年目はそのベンチに屋根を作った。私たちが何か作ろうとなり最初は竹馬を作ろうという話になった。

しかし、話を進めていくうえでプレーパークには竹馬があるということを知った。責任者の竹内さんに子どもが落書きできるように黒板を作ってはどうかという提案をいただいた。私たちが子どもたちが喜ぶのなら作ろうということで活動に行く4人で黒板を製作することを大きな目標に設定した。

私個人としての目標は、子どもと接するうえでどのような接し方をしたら喜ぶのかということを考えながら接していくということが目標であった。年齢によ

でも接し方が変わってくると思い、その接し方の小さな変化を考えていけたらいいなと思ったのである。

2. 新青樹での活動

6日間の主な活動としては以下の通りである。まず、必ずやることとして遊具の準備と片付けた。プレーパークは、公園内にあり、場所によって異なるが金、土、日の3日しかやっていない。よって、遊具を出しっぱなしにすることはできないので毎度準備して、片付けている。

また、来た子どもと遊ぶことも活動としてあった。工具を使って一緒におもちゃを作ったり、一緒に走り回ったり、夏季限定のウォータースライダーで遊んだりとさまざまな遊びを一緒にした。最後に、活動先に一緒に行った4人で黒板を製作した。その黒板は佐布里プレーパークと於大プレーパークの2か所で作った。

3. サービスラーニングを通しての学び、気づき

サービスラーニングを通して学んだことは、子どもが数時間に間に変化していくということである。プレーパークに遊びに来た子どもで、最初は話しかけてもあまり反応されなかった。しかし、私とその子どもで工具を使い一緒にものを作っているうちに次第に反応してくれるようになり、最終的に一緒に走り回って遊ぶレベルにもなった。このことから、子どもはちょっとしたことで変化していくのではないかと感じた。

また、子どもとの接し方についても学ぶことができた。子どもに応じた接し方があると思った。それは、どの子にも同じように接していくのではなく子どもの性格を見極めながら接していくことも大切であると感じた。

4. まとめ

上記に述べたように、子どもは日々のなかで成長していく。そのきっかけ作りの場としてプレーパークは重要なものである。竹内さんから、プレーパークに来てから怒りっぽいのが減った子がいるということや、人見知りが減った子がいることを聞いた。現代では、小学生からスマホや携帯ゲーム機で遊ぶ子どもが多い中で自然に触れあいながら遊べるプレーパークは大切であると感じた。

見知らぬ子どもたち同士が最低限のルールのなかで一緒に遊び合い成長していく。そのいいきっかけとしてプレーパークは環境の整った場所である。私も6日間の活動で帰り際には、笑顔になって帰っていく子どもたちが見ることができてとても有意義なサービスラーニングであった。

若者の居場所づくり

私はサービスマーケティングで、特定非営利活動法人「新青樹」に6日間訪問させて頂いた。

新青樹さんは若者にとって居心地のよい地域・魅力ある地域にすることをめざして若者の居場所づくりを行っている団体である。私たちは活動の中のひとつであるプレーパーク啓発事業にお邪魔させて頂いた。

プレーパークとは、子どもが自由にのびのびと遊べるように禁止事項をなくし、「自分の責任で自由に遊ぶ」ことを大切にし、子どもの遊びを保障する場である。

そのサービスマーケティングを通してまとめたいと思う。

①自分の成長と気づきについて

プレーパークでは子どもだけ、家族連れ、ママ友と子どもたち、など様々な方が来られた。プレーパークは3ヶ所あり、その全部に行かせていただいたのだが、場所により来られる人々の形態が異なっていた。

"プレーパークらんらん"では住宅街の中にあるからなのか、子どもたちだけで来ることが多かった。"そうり"や"おだい"プレーパークでは子どもたちだけでも多かったが、家族連れやママ友同士の子連れが圧倒的に多かった。その中では、「このプレーパークで知り合って仲良くなった」という話を聞いた。このプレーパークは地域市民の繋がりを広げていると感じた。

そしてこのプレーパークには障害を持った、または持っていると思われる子たちが見受けられた。障害を間近で感じたことのない私にでもわかる何か異質なものを感ずる子もいたが、プレーリーダーに言われて気づくものもあった。プレーリーダーとは、ひとつのプレーパークに1、2人は必ずいる主に子どもたちの見守りをする人である。

また、子どもから「遊ぶ場所がここしかない」という意見を聞いた。プレーパークに来る子どもたちは決まった子どもたちが多い。プレーパークが子どもたちの居場所になっているのではないかと感じた。

プレーパークでは「危ない」「うるさい」「きたない」などの言葉は言わないようにというルールになっている。それはケガをすることが全て悪いというわけではないからである。ケガをして初めてこれは危ない、危険なんだと子ども自身が気づくことも学びである。サービスマーケティングで私たち学生がプレーリーダーとして子どもたちを見守り兼ともに遊ぶことをしていたのだが、危険予知能力が低く、どこまでが正しい行動なのか分からずに苦戦した。

プレーパークには普段使うことのない、竹ノコギリやクランプなど様々な工具が用意されていて、子どもたちの創造力が働く工夫がされていた。これは新青樹のプレーリーダーの提案で、家が大工さんなので工具があるからやってみようという考えが素晴らしいと思った。

プレーパークに来られる方やプレーリーダーさんに関わることで人の暖かさを改めて感じることができた。そして子どもたちの創造力やパワーは無限大だと改めて思った。

②活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

この活動を通して、若者の居場所づくりは必要不可欠だと思った。

今の社会は若者が生きづらくなっていると感じる。愛知県内では子どもの貧困率が6人に一人と高く、また全国的に見ると児童虐待件数も過去最多となっている。そのような環境のなかで家庭に居場所がなく、そして学校にも居場所がない子どもたちはどこに居場所があるのか。子どもの頃の育つ環境はその後の人生に大きく影響する。なので、このようなカタチでアプローチしていくことはとても良いと思った。

新青樹さんのプレーパークで子どもを通じて地域住民の輪が広がっていることはWIN-WINの関係であると思った。子どもにも子を持つ親にも、固定の子どもたちが多いことから顔見知りや、友人になるキッカケづくりにもなる。

地域のつながりがないと、火事や犯罪など何らかの事件事故や災害があったときに情報の共有が難しくなる。それがために発見が遅れたり、気づくことができず大きな事件につながる可能性がある。それを防ぐために地域住民のコミュニケーションを円滑にすることが重要であり子どもの存在は大きいと考える。

貧困世帯はどうしても地域孤立がみられることが多い。私が子どもの頃育った地域では過疎化がひどく、また貧困であったために町会費を払っておらず孤立世帯であった。だが、地域の人のご好意で子どもだけ地域行事に参加させていただけていたこともあり、参加するお金がかからない地域でのプレーパークはとても魅力的だと思った。お金がかからない地域参加できる事業がこれから増えていくといいと思う。